

戦争の終わりを告げる

進駐

終戦後、米軍は鹿屋への進駐を開始しました。昭和20年9月3日に先遣隊14人が航空機で鹿屋に到着。9月4日には高須の金浜海岸に陸上部隊が上陸しています。

進駐の報に接し鹿屋では、将兵が山に入り進駐してくる米軍とゲリラ戦をする準備をしていましたが、関係者の説得で解散したといひます。また、住民も米軍が来ると何をされるか分からないという情報も広まり、多くの人が住む場所を離れ、避難したそうです。

こうして、戦争は終わりましたが、真珠湾攻撃から進駐軍の上陸まで関係していた鹿屋には、数え切れないほどの戦争の記録があります。

終戦から68年を迎え、戦争の真実や教訓が徐々に風化し、忘れられつつありますが、このような時だからこそ、この平和な鹿屋でも悲惨な戦いが行われていたという事実をしっかりと後世に語り継いでいくことが大切なのではないでしょうか。

多くの若い命が失われた

特攻

敵艦船に体当たりするという特別攻撃隊による必死の攻撃は、鹿屋では昭和20年3月11日から始まり、沖縄戦が激しかった4月～5月にかけて、集中的に出撃。全国で最も多くの特攻隊員が南の空へ飛び立っていきました。

この鹿屋から飛び立っていった908人の霊を慰めようと、昭和33年に海上自衛隊鹿屋航空基地を見下ろす今坂町の小塚公園に特別攻撃隊戦没者慰霊塔が建てられました。

慰霊塔では、毎年4月に特別攻撃隊戦没者追悼式が開催されており、全国から生存者や遺族の方々が追悼に訪れています。

また、申良でも363人の特攻隊員の霊を慰めようと、昭和44年に申良飛行場の跡地に慰霊塔を建立。恒久平和の願いを込め「平和公園」と命名し、以来毎年10月に戦没者追悼式が開催されています。



亡くなった隊員のために
半世紀にわたる
慰霊塔への参拝

泊竹藏さん
(80歳)



「沖縄に出撃する。身体は海の底かもしれないが、魂は必ずここに戻ってくる」と話した申良航空隊基地の若い特攻隊員の出撃前の言葉を信じ、昭和36年以降半世紀の永きにわたり参拝を続けたのが泊竹藏さんです。

泊さんは、申良海軍航空隊出撃戦没者慰霊塔ができる前には自ら建立した小さな祠に、慰霊塔完成後には慰霊塔と戦没者慰霊の碑に、朝と夕方に風雨もいわず、また自らのお金で花を捧げ、参拝を続けられました。

申良海軍航空隊から特攻機が出撃していた当時小学生だった泊さんは、特攻機の見送りが日課で隊員から形見のマスコットをもらえるほど、かわいがられていたそうです。

「自らが亡くなった隊員のために慰霊をしなければならぬ。これは、生き残った者の責任です」と語る泊さんは、現在体調を崩され昨年8月以降参拝ができなくなっていますが、体調が良くなったら、また参拝を続けたいと話してくれました。



▲申良海軍航空隊出撃戦没者慰霊塔

風化させてはならない
輝北に残した
戦争の記録

歌丸千敏さん
(88歳)



私は、戦争の終結を少年兵として満州でむかえました。その後8月には、シベリアに強制連行され3年半の間抑留されました。

そこで課されたのは、シベリア鉄道の枕木を作る伐採の仕事でした。わずかばかりのあずきのご飯で、毎日莫大なノルマが課され、銃を持った警備兵に常に監視されている環境で過ごしました。そのため、多くの仲間は倒れ、穴を掘っては埋葬するというようなことも連日繰り返されました。私が運良く輝北に帰れたのは、電気工事の技術を学んでおり、それが仕事になったからだと思います。

帰国後、この悲惨な戦争体験を絶対に風化させてはならないと思い、戦争の記憶を次代に引き継ぐ取り組みを行いました。

「慰霊を超えて」という、輝北町に墜落した米国のB-29大型爆撃機に関するエピソードをまとめた本を発刊したり、また、墜落した燃料タンクや機銃を輝北町歴史民俗資料館に展示できたことなどです。後日、そのB-29を撃墜したパイロット(広島県在住)が慰霊をしたいと50年ぶりに輝北を訪れました。彼は「これで気持ちが晴れるというものではない。後世に伝え、二度と戦争が起きないよう努めたい」と話していました。

戦争は何年経ってもこれほどまでに人の心に傷を残します。絶対に戦争をしてはいけません。このことだけは、必ず次の世代に伝えていきたいです。



▲輝北歴史民俗資料館に展示されているB-29機銃

12.21
ロードショー決定
永遠の0
の世界を歩く

平成18年の初版から、累計発行部数300万部を超える大ベストセラーとなった「永遠の0」。

同作では、鹿屋海軍航空隊基地や鹿屋航空基地史料館なども舞台として登場するほか、4月・7月には著者の百田尚樹氏が鹿屋市を訪れるなど鹿屋に縁の深い作品となっています。



◎百田尚樹 / 太田出版 講談社

くあらすじ

「生きて妻のもとへ帰る」

日本軍敗色濃厚ななか、生への執着を臆面もなく口にし、仲間から「卑怯者」とさげすまれたゼロ戦パイロットがいた...

人生の目標を失いかけていた青年・佐伯健太郎とフリーライター姉・慶子は、太平洋戦争で戦死した祖父・宮部久蔵のことを調べ始める。祖父の話は特攻で死んだこと以外何も残されていなかった。

元戦友たちの証言から浮かび上がったきた宮部久蔵の姿は健太郎たちの予想もしないものだった。凄腕を持ちながら、同時に異常なまでに死を恐れ、生に執着する戦闘機乗り―それが祖父だった。

「生きて帰る」という妻との約束にこだわり続けた男は、なぜ特攻に志願したのか? 健太郎と慶子は、いに六十一年の長きにわたって封印されていた驚愕の事実をたどりつく。



宮部久蔵が機乗した? 零戦五二型



佐伯健太郎が眺めた霧島ヶ丘中腹からの風景



健太郎・慶子が訪れた史料館



特攻隊と言えば知覧が有名で、鹿屋はあまり知られていません。しかし、鹿屋は知覧の倍以上の特攻隊員が亡くなられており、日本を代表する特攻隊の基地です。

今回鹿屋を書かせていただき、改めて特攻を学ぶ機会となりました。

映画・小説を通して鹿屋を日本人に知っていただきたいと思います。

百田尚樹